12月17日：クライマックス・ヒートアップ 前

文章が多くなりすぎてさらに割る、次は後編Part.1ですかね……（白目）

◇

赤子の首を斬り落とす。文字だけ見れば論外も論外、論ずる以前に提唱した者を警察に突き出す事満場一致間違い無し。

ただその赤子が山に抱きつけるほどに巨大で、顔が蝶で、そこに浮かんだ大量の眼の模様からビームを撒き散らす"力"そのものが意思を持った大怪物であれば人類用の倫理を持ち出す者はいなかった。

「人数を集めろ！ 奴の目線をこっちに引きつけて火口まで誘導するぞ！！」

「飛べる奴らは背中に回れ！ 首に集中攻撃だ！！」

「ねぇこれ地上班高確率で死ぬわよね！？」

「狙い(ホーミング)は荒い！ 全力で横に飛べばちょっと装備が焦げるだけだ！」

「首下は危ないぞ！ 手の動きに巻き込まれる！！」

「上がれ上がれ！ 戦術機乗りなら一人くらい担げるだろ！ 上がるやつに頼んで火力持ちをしがみつかせろ！」

「途中で落としたらごめんな？」

「抱きついてやろうか！？」

「それはちょっと中身関係なく女アバター以外遠慮してぇ……」

◇◇

「まさか決戦用で持ち込んだ戦術機でやる事が穴掘りってさぁ！」

「……見回してた(・・・・・)？ まさか首が据わっている……？ いや、腕の長さ太さから概算しても生後二ヶ月程度の赤子が再現されている……チッ、赤ちゃんの健やかな成長すらも侮辱しやがるのか、許せねえ……っ！」

狂人が暴論を振り回しながら暴力を振るっている。何もかもが狂っているやべー奴を傍らに、オイカッツォは休む暇なく両腕を足元……焠がる大赤翅のうなじに叩きつけていた。

「なんかもっとこう……無双系を想像してたんだけどなぁ！？」

戦術機「屏風ノ虎(スクリーンティガー)」はマナ……魔力を圧縮し、それを弾丸や爪などの形状にして解放する機構を搭載している。

近・中距離に対応した格闘戦に優れたコンセプトではあるが……攻撃対象が山と互角なサイズの怪物ともなれば、近距離戦(インファイト)と言うよりももはや土木作業に近い有様であった。

「ダメージの治りが遅いし、攻撃も通りやすいから実際有効なんだろうけど……！」

兎にも角にもサイズが大きすぎる。なんとか背中に辿り着いたプレイヤー達が続々とうなじへの攻撃を始めているが、背中だけで野球でもサッカーでも好きにできそうな広さがあるならば、当然首も尋常の大きさではない。恐らく背骨もちょっとしたトンネル程のサイズがあるだろう。

「誰か発破とか持ってねぇか！？」

「火属性相手に爆弾なんて持ってこないわよ！ ただでさえ死んだら装備全損なのに！！」

「俺持ってきてる」

「いやこれマジでどうするんだよ……囮やってる奴らもいつまでも耐えきれないだろ……」

「ていうかさっきから数えてたけど段々顔の蝶翅に浮かぶ目の数が増えてるんだよ！ いくつがMAXかは知らないけど上限まで増えたらヤバいんじゃないのか！？」

叫ぶような会話の中で、オイカッツォは確かにその言葉を聞き取った。

「今爆弾持ってるって言ったの誰！？」

「え、俺だけど……」

「いくつ持ってきてる！？」

「ふっ………めっちゃある」

装備ロストを見越してか、店売りだろうこれといった特徴のない皮鎧を身に纏ったプレイヤーが手を挙げたのを見つけ出したオイカッツォはその人物の手を引きながら土木工事(こうりゃく)の最前線、うなじのど真ん中へとそのプレイヤーを連れていく。

「爆弾持ちが来た！ 設置するからいったん離れて！！」

戦術機を装備したプレイヤーの発する声は戦術機を通してある程度拡声される。オイカッツォの言葉によって人が退いた、確かに削られてはいるものの依然として骨の露出していない傷口まで発破持ちのプレイヤーを案内する。

「ありったけ設置して！」

「おうさ」

爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が爆弾が爆弾が爆弾が爆弾爆弾爆弾爆弾爆弾………………

「え、どっから出てきてんのそれ……」

「………本当はこれで王都更地にしようと思ってたんだけど、こっちの方が楽しそうだし」

とんでもない地雷を在野から掘り出してしまった。ひきつった顔を「屏風ノ虎」で隠しつつ、明らかに個人が所有していい量ではない爆弾がびっしりと設置された傷口から離れつつ隣にいるプレイヤーに起爆を頼もうとして……ふと、まだ一度も名前を呼んでいないことに気づいた。

とはいえ一々名前を聞く必要はない。なにせこのゲームでは頭上にプレイヤーネームが表示されているのだ。そのプレイヤーの頭上に表示された名前を読み取ったオイカッツォは、改めてその名を起爆の指示と共に呼ぶ。

「えーと………じゃあ、しいたけさん起爆よろしく」

「あいさ」

◇◇

「VooooooooooooooGyyyyyyyyyyyyyyyyaaaaaaaaaaaaaaaaarrrrrrrrrrrrrrrr！！！？」

焠がる大赤翅が悲鳴を上げた。それほどまでに巨大な赤子のうなじ部分で起きた爆発はすさまじいものだった。

「何をしたのよオイカッツォ……！」

地上で焠がる大赤翅が放つ灼眼光を回避しつつも、なんとか注意を引き付け続けていた地上班に混ざっていたペッパー・カルダモンは背中へと登って行ったオイカッツォが一体何をしでかしたのかと疑問符を浮かべつつも、これまでなんとか手繰り寄せていた焠がる大赤翅の好奇心(ヘイト)が一瞬で霧散したことに歯噛みする。

そも、地上のプレイヤー達は殆ど囮としての役目を果たせていなかった。何せ腕に近づけば踏み潰され、顔面には殆ど攻撃が届かない。彼らにできることはありったけのヘイトスキルを当てて視線を誘導するくらいだ……だからこそ、うなじでの大爆発という明確なダメージによって焠がる大赤翅のヘイトはいとも容易く地上のプレイヤー達から外される。

「文字通り眼中に無いってわけね……」

ぎょろぎょろと動いていた眼球の全てが自身の背中を見ようと顔ごと同じ方向に動いている。頭部が未だ健在であるならば、まだ背中に上がったプレイヤー達が目的を果たせていない、ということだ。

「BaaaaaaaaaaaaaaJuuuuuuuuuuuuuu……！」

そして何より、これまで生物らしい感情を見せていなかった焠がる大赤翅になって見せた感情……それが怒りの一色に染まっている。瞼など無いはずなのに細められた蝶貌の灼眼球は、言葉無くともその意思を雄弁に示している。

「ブチ殺す、ってところかしら？」

目は口ほどに物を言う、そして焠がる大赤翅は目で示した意思を躊躇うことなく実行する。

「オイオイオイ……なんだあの特大眼球は……！？」

「ねぇ、今の大赤翅の頭くらいある眼球からぶっ放されるレーザーってどれくらいの規模だと思う？」

「一番最初にサードレマに撃ったアレと同規模かそれ以上だろうさ！ どうすんだよ！？」

焠がる大赤翅、その代名詞たる蝶の翅に浮かび上がった灼熱の眼球から灼熱の眼差し(レーザー)が上に(・・)放たれる。二十近い"まなこ"模様から放たれた光は、もはや意にも介さぬ雨雲を突き破る……ことなく、一点に収束して巨大な球体を生み出していく。

それはもはや、太陽と言っていいほどに眩く……そして、熱い。そしてそれに瞳孔が開いたことで、その巨大な……あまりに巨大な太陽の如き灼熱の巨眼球が己の首に痛みを与えた下手人たちを睨み据える。

「どうする！？ どうにかタンクを集めてヘイトスキル一斉に使わせるか！？」

「そもそも個々人のスキルでどうにかなるものなの？」

「だから集団で使わせるんだろ！？」

地上のプレイヤー達が混乱と口論で右往左往する中、ペッパー・カルダモンは……………

「……………ムカつくわね」

皆とは違う理由で(・・・・・・・・)怒りを抱いていた。

「歯牙にもかけられないってのは………やっぱり、ムカつく」

その感情に焠がる大赤翅は一切関係していない。ただ………そう、「自分の行動が相手にとって何ら興味を引かない」という今の状況から彼女自身の脳内で完結した連想ゲームで生まれた怒りが、まさしく八つ当たり的に焠がる大赤翅に向けられている。ただそれだけだ。

そうとも、どれだけ強い相手であろうと、強大な敵であろうと、最強の存在であろうと………いつだって弱者には挑戦の権利がある。挑むために行動することだけは、万人が等しく持つ権利だ。

だがその挑戦を、受ける側である強者が蔑ろにすることは………とても、腹が立つ。

強者の都合を考えない弱者の傲慢(エゴ)、だがその傲慢を燃料にしてこそ弱者は初めて強くなる。それこそがペッパー・カルダモン……夏目恵が魚臣慧(オイカッツォ)の背を追う原動力であり、さらにその上の存在に喧嘩を売る理由なのだ。

「炎だのエネルギーだのなんだか知らないけど………要するに、眼があのモンスターにとっての重要な要素なんでしょ？」

「何か案があるの？」

誰もが焠がる大赤翅を見上げ、確信のない行動を取る中。一人明確な理由を抱いて行動するペッパーに気づいた炸裂グリンピースがその理由を問う。

「眼を奪えばいいんでしょ？ だったら必要なのは強さじゃない………派手さよ」

錬金術師というジョブにおいて、それは少々ロマン寄り………身も蓋もない言い方をすれば、ネタ寄りのアイテムだ。作成に要求されるアイテムこそレア度の低い手に入れやすいものだがその数が多く、作成には多大な量のマーニが要求される。そして作ったとしても使用できる状況が少々特殊すぎるが故に実戦向けとは程遠いという評価を下されたもの。

だがそれはこのイベントが始まる前までの評価だ。さらに言えば、青き始源の眷族が攻めて来たころには確かにプレイヤー達から注目されつつあったもの。しかし、その”狙い”が大雑把すぎるが故にやはりネタの領域から逃れられなかったもの………

だが、相手は巨躯なる怪物焠がる大赤翅。その”狙い”が………文字通り、命中率(・・・)が大雑把であっても当たる確率が極めて高い相手であれば。

「まさか本当にこれを全部使うことになるとはね………！！」

錬金術によって作成された薬品が入ったガラス球を魔力的爆発によって、破損させないまま遠距離に射出する錬成品射出用迫撃砲《アルケミック・モーター》。諸事情で結構な額のマーニを保有するに至った”戦争成金”であるペッパーが用意したその数八門。

それが今、魔力の火を噴いた。

・錬成品射出迫撃砲《アルケミック・モーター》

要するに迫撃砲。錬成した毒や薬などを遠距離に射出することが出来るアイテム（武器ではない）。

ただし冷静に考えれば分かるがシャンフロのバトルシステム的に迫撃砲が必要になるような状況自体がそもそも無い、という致命的欠陥故にネタアイテムとして扱われていた。（良くてPK用の不意打ち）

ただ、彷徨う大疫青戦のような防衛戦においては有用ではないか、と言われていたが大疫青自体がそんなに大きくないため、結局狙いづらいじゃねーかとされていたが………適当に撃っても当たるような敵がいたならば、その隠れ続けていた真価は十全に発揮される。

ところで11月17日にコミカライズ版シャングリラ・フロンティア6巻が発売されます！

表紙はコミックから入った方々にヒロインと誤認されまくるエムル（人間態）です、本の上にいるのはサンラクに金を貢がれてる奴とサンラクに素材を貢がれてる奴とサンラクに金をカツアゲされてる奴です。

エキスパンションパスでは編集I氏にめちゃくちゃ好評を貰った外道三国志です、頑張って一話に収めました。

ぜひぜひお手に取ってみてください。